

論文

地理的想像力の醸成と沖縄師範学校の修学旅行

—— 日琉同祖論の一前提 ——

松 永 歩

はじめに

I. 明治期の師範学校における修学旅行

II. 沖縄師範学校の修学旅行

1. 修学旅行の実施状況

2. 視察活動中心の修学旅行

3. 内地と沖縄との差

むすびにかえて

はじめに

小論の目的は、明治後期の沖縄における新エリートの地理的想像力を修学旅行との関連で考察することにある。沖縄の新エリートとしてここでは、沖縄県師範学校（以後、沖縄師範学校と記す）の学生に着目する¹⁾。小論で取り上げる沖縄師範学校は、他府県の師範学校と比べると少し性質が異なる。沖縄師範学校は、教員養成機関として機能していただけではなく、沖縄において新教育を教授する中等教育機関でもあった。卒業生は、教員になるだけでなく様々な分野で活躍した。つまり、沖縄師範学校は、教員養成にとどまらない、沖縄を牽引する新エリートを創出する機関でもあった²⁾。

新エリートを養成する上で、学校での教科書・教材やカリキュラムの内容の分析が重要である。カリキュラムは、決まった修業年限における一定の教育の目的に合わせて考え出された教育内容とその学習を計画したものであり、教科書・教材は、カリキュラムの内容が反映されている。教科書・教材やカリキュラムの考察は、生徒たちに何が求められているのかわかる。修学旅行は、そのカリキュラムの中の一つに位置付けられる。学校行事である修学旅行が、沖縄師範学生にもたらした影響はいかなるものであったのかを検討してみたい。

沖縄師範学校の修学旅行は、彼らの視野を広げ、広い世界の中で将来の沖縄について考えるよう示唆を与える内容であった。修学旅行は、彼らの地理的想像力の醸成を促したと言える。ここで提示する地理的想像力は、頭の中にイメージされる地図が物事を思考する際に、拡大され、縮小されることによって、その思考を左右する一種の想像力を指す。沖縄師範学校の生徒たちは、

修学旅行で地理的想像力を培うことによって、将来の生徒たち自身の進路選択が拡大した。生まれ育った沖縄という土地だけではなく、他の地域を知ることにより、卒業後、沖縄では達成できないことを他の地域で実現したいと思い、実行する生徒もいた。また、他の地域を知りながらも、沖縄にとどまるという選択をした生徒もいる。頭の中に地図を描くことで、自分の生まれ育った地を俯瞰的に、または客観的に捉え、自身を取り巻く環境を把握し、これを拡大することができる。地理的想像力の有無、大小は、沖縄の将来像構築の源泉になり得る。

修学旅行を通じ、沖縄の地理的な位置、および帝国日本（内地だけではなく、台湾などの植民地を含む）の版図が把握され、内地が、そして首都東京が体験される。以降、本稿での第1節では、明治期の師範学校の一般的な修学旅行を概観した後に、第2節では、沖縄師範学校の修学旅行を取り上げる。沖縄師範学校の内地への修学旅行は、当時の日本を代表する土地、地域を廻る、視察・観光旅行であった。視察中心の修学旅行は、沖縄師範学生に「驚き」や「感動」を与えた。しかし、次第に修学旅行記では、「驚き」や「感動」の連続に関する記述よりも、内地と沖縄を比較する視点で記録が書かれるようになる³⁾。この視点の転換の背後に、次世代の沖縄エリートが自分たちの置かれている立場を認識し始める様相がみてとれる。この点は、彼らのアイデンティティ論の端緒である日琉同祖論の形成につながると筆者は考える。

I. 明治期の師範学校における修学旅行

では、明治期の師範学生はどのような「移動」体験をしていたのか。本節においては、明治期の師範学生の「移動」体験について見ていきたい。師範学校では、将来の教員を育てるべく教育がなされていた。知識を教授する授業、教授法を学習する実地形式の授業が行われていた。次第に、教室や校舎にとどまらず、校外教授も導入されるようになる。校外教授は、遠足や行軍そしてそれから派生した修学旅行などと呼ばれるようになり、教科外活動として法制化されていった⁴⁾。

修学旅行は、日本では明治以来、現在でも多くの学校が実施する学校行事である。学校単位で旅行を行うというのは、世界で見ても非常に珍しい。では、修学旅行はいつから行われているのだろうか。多くの研究が指摘しているように、1886年（明治19年2月）東京師範学校が行った「長途遠足」の実施が修学旅行の嚆矢とされている。東京師範学校での「長途遠足」では、学術教員を中心に、行軍の傍ら学術調査・学校見学・標本収集がなされた。東京師範学校の「長途遠足」が後に全国の師範学校に広まり、各地の小学校、中学校、高等学校などでも修学旅行が導入されるようになったと言われている。

各学校で修学旅行が実施されるようになり、教育法令上、初めて「修学旅行」という用語が用いられるようになったのは、明治21年8月の「尋常師範学校設備準則」においてである。「尋常師範学校設備準則」は、「修学旅行は定期の休業中に於いて一ヶ年六十日以内とし、可成生徒常食事費以外の費用を要せざるの方法に依りこれを施行すべし」と規定している。また、そこには、師範学校教育における修学旅行の持つ意義として、次の3点が記されている。すなわち、「1、

生徒の見聞を博むるの利益、2、生徒をして世態に通せしめ人生の苦楽を実施せしむるの利益、3、教員と生徒との間に親愛の情を通ずるの利益」である⁵⁾。上記の3点からわかることは、修学旅行を通して見聞や知見を広げることを目標としていること、しかもその修学旅行が、「楽」しいことばかりではなく、「苦」も学ぶ場として想定されていたことがわかる。その当時の移動が徒歩中心であったため、肉体的な苦勞を指していたのだと考えられる。また、生徒だけではなく、教員と生徒が寝食を共にすることで、互いの信頼関係も結ばれるという意義も込められていた。

各学校の修学旅行は、それぞれの学校沿革史によって実施状況が知られており、また学校ごとの事例研究が行われている⁶⁾。事例を挙げながら、修学旅行の実施時期や内容、そしてその普及、呼称の変遷、それに伴う修学旅行の目的について、これまで研究がなされてきた。呼称にかんしては、「行軍」、「長途遠足」、「遠足」、「修学旅行」と様々な言葉が用いられた。「行軍」の目的は、「身体的かつ精神的鍛練」であったのに対して、「長途遠足」は、この「行軍」の目的に、「学術上の研究という目的が結合」したものである⁷⁾。全国の師範学校が「長途遠足」を実施するようになると、「長途遠足」という呼称が次第に「修学旅行」という言葉に置き換えられるようになった。

明治21年8月に「尋常師範学校設備準則」が出され、行事の呼称は「修学旅行」と呼ばれるようになるものの、その内容には、一部、兵式演習を含んでいた。つまり、明治20年代では、「修学旅行」と名付けられた行事の中に、軍事的な要素が含まれていた。実際に明治20年代、30年代のいくつかの師範学校の修学旅行を見てみると、明治23年3月27日から3月28日に埼玉師範学校が実施した修学旅行では、鉾泉や松山城址の探検の翌日に「射的」を行っている⁸⁾。また、明治23年に実施された京都師範学校の旅行の記録の中に、内国博覧会の見学旅行について記されている。しかし、その形式は、「全生徒は武装して加藤校長自ら引率、軍歌を高唱しつつ東上、銀座を行軍し」たという⁹⁾。徒歩で移動の際、行軍の形態をとっていたことがわかる。明治24年に行われた福島尋常師範学校の修学旅行は、「対抗運動および実弾射撃」などを行っている¹⁰⁾。

明治25年7月、文部省は省令第八号により「尋常師範学校ノ学科及其程度」を改正した。

「夏期休業及学期末休業等成ルヘク適当ノ時期ヲ撰ビ教員ヲシテ生徒ヲ率キテ修学旅行ヲナサシメ山ニ郊野ヲ跋涉シテ其身体及精神ヲ鍛練スルト共ニ知見ヲ広シメンコトヲ務ムヘシ又日課外ニ於テ便宜操櫓術・柔術・撃劍等ヲ練習セシムルカ如キモ亦有益ナルヘシ」¹¹⁾。

ここからわかることは、なるべく長期休暇中に修学旅行に行くこと、さらに山や広野などを散策し、知見を広めることと、身体や精神の鍛練が修学旅行の目的として記述されていることである。体を鍛えることを踏まえた行軍や兵式練習が文部省の想起する修学旅行の一部にあったことが確認される。このように、明治20年代、30年代の師範学校の修学旅行は、研究活動の実施と「身体と精神の鍛練」が含まれた旅行であった。それは、交通機関の未発達や日清戦争という時代の特性を反映していた。

修学旅行の体系的な研究として、山本信良・今野敏彦の『近代教育の天皇制イデオロギー』

が挙げられる。山本・今野は、同書の中で明治期の学校行事を考察し、修学旅行が明治30年代前半には広範に普及し、その形態も定型化したことをあきらかにした。また、明治期の修学旅行は、「忠君=愛国、天皇=国家のための共同一致の精神を培養する」ものとして評している。つまり、戦前の修学旅行は、天皇制を下支える皇民化政策を浸透させる装置として解釈され、語られてきた。制度や政策の意図に着眼するため天皇制イデオロギーを注入する手段として修学旅行を捉えている。しかし、沖縄師範学校の修学旅行について見てみると、必ずしもそうとは言えない。小論では、修学旅行を皇民化政策の文脈から切り離して考えてみたい。沖縄師範学校の生徒が何をして、何を見て感じたのか、その点に着目する。

Ⅱ. 沖縄師範学校の修学旅行

明治20年代、30年代の師範学校の修学旅行は、学術研究でありながら「射的」や「行軍」などの軍事教練を完全に切り離すことができなかった。では、沖縄師範学校で行われた修学旅行は、どうであったのか。内地と同じものであったのだろうか。本項では、沖縄師範学校の修学旅行の実施状況を取り上げ、その特徴を検討する。端的に言って、沖縄師範学校の修学旅行は、本土の修学旅行とは少し異なっていた。沖縄師範学校の修学旅行は、明治29年の2度の沖縄本島内の修学旅行のみ軍事的要素が確認されるが、内地への修学旅行には軍事教練の要素が確認されない。沖縄師範学校の修学旅行は、視察や観光をメインとした、現代の修学旅行に近い形態であった。

1. 修学旅行の実施状況

沖縄師範学校における最初の修学旅行は、1893年（明治26）の九州旅行である。この九州旅行で、多くの学生がはじめて県外へ出た。この年の修学旅行を皮切りに、県外への修学旅行は、二年に一度のペースで行われた。1895年（明治28）は、京都にて開催される内国勸業博覧会の見学を兼ねて京阪ならびに伊勢地方への修学旅行が実施された。その次は、1897年（明治30）の2月に九州への修学旅行が実施され、その二年後の1899年（明治32）1月には、第四学年の生徒が初めて東京修学旅行を体験している。日本の首都への修学旅行は、以降毎年実施されるようになった¹²⁾。内地への修学旅行が開始されてから、明治29年だけ、5月と11月の2回、沖縄県内で修学旅行が開催されている。

沖縄師範学校校友会誌『龍譚』の記録には、明治26年の九州旅行が何日間の旅だったのか、九州のどこを旅したのかという詳細は記されていない。また、それから2年後の1895年（明治28）の京阪地方への修学旅行に関しても詳細については確認できない。

旅行の行程がわかるのは、1896年（明治29）以降の修学旅行である。沖縄県私立教育会の機関紙である『琉球教育』が1895年（明治28）に発刊されたこともあり¹³⁾、そこに適宜記されるようになった。最初に確認できる旅行は、『琉球教育』第5号（明治29年5月）における記事である¹⁴⁾。この記事以降、『琉球教育』誌上では、沖縄師範学校の修学旅行だけではなく、沖縄

中学、高等小学校、国頭実業補習学校などの修学旅行記なども登場する¹⁵⁾。

修学旅行の形態については、沖縄県内の修学旅行と本土への修学旅行とでその形態が異なっていた。沖縄県内で実施された修学旅行は、兵式演習であった。「これ迄年々修学旅行を挙行すれども、皆兵式演習旅行にして、近四五年間純然たる学術研究旅行を行ひしことなき」（『琉球教育』第12号、明治29年12月）とあるので、明治29年以前の沖縄県内の修学旅行に関しては兵式演習形式で行われていたことがわかる。

明治29年の11月に実施された県内の修学旅行では、兵式演習を行いながらも、修学旅行本来の目的である「学術研究旅行」も実施した。この点も同時期の本土の修学旅行と同様である。では、少し中身を見てみよう。明治29年11月の修学旅行は、県下中頭郡にある平安坐、高離、伊計、濱の各島に向う往復日数6日の旅程であった。参加者は、同校教諭黒岩、助教諭心得阿多、訓導高原、書記山城、生徒60名である。この時の修学旅行は、「学術研究旅行」が強調されていた。それまでの旅行と違う点は、旅行に行く前に各自に研究調査をすべき科目が定められていた点である¹⁶⁾。

第四年生 主ら教育に関する調査研究すべく兼て地理歴史農業中の一科を撰びて研究すべし。但、研究調査すべき綱目は、本稿より予め指示すべく臨機の事は其都度附属教員より示導すべし

第三年生 地理歴史農業中の一科

第二年生 地理農業中の一科

第一年生 地理科

「学術研究旅行」であるために、生徒たちに旅行終了後、報告書を提出することが義務付けられていた。明治29年度の生徒の報告書はよく書けていたようで、「他府県の師範生に凌駕する程のものさへありて頗る参考に資すべきもの」もあったという（『琉球教育』第12号、[第2巻、p.51]）。いずれの学年においても、地理科が設定されていたことが興味深い。この旅行では、自分たちの生れ育った沖縄について調査を行うという、現在でいう社会見学に近い、言わば、宿泊の伴う社会見学であった。沖縄では、この年以降、沖縄県内で宿泊の伴う行事が実施されても、「修学旅行」と呼ばず、沖縄県外を旅先とする旅行についてのみを「修学旅行」と呼ぶようになる。「発火演習」、「兵式旅行」、「遠足」というように行事が細分化され名称に実施内容が反映されるようになった。この点は、本土における、修学旅行や兵式旅行の細分化と同様の形をとっていると言える。

他方、本土内への修学旅行について見てみよう。明治30年の修学旅行に関する短い記事をここで紹介しておく。この記事から、修学旅行に参加した学年や日数などを確認することができる。

本県師範学校生徒八十名は、今二月二十二日を以って、安藤同教諭、中谷同校教諭心得、阿多同校助教諭心得、木脇同校書記等の率いる所と為り、汽船舞鶴号に搭し、長崎以下九

州各県に旅行せり。その往復の日取りは、凡そ三十五日間の予定なりという。同校留守居の職員並びに中学校の職員等那覇港に見送れり¹⁷⁾。

ここでは、生徒数が「八十名」と記されている。『文部省第二十四年報』(明治29)で確認してみると、沖縄師範学校在籍者数は、81名であることから、全生徒が修学旅行の参加対象であったということがわかる¹⁸⁾。同時代の他府県の師範学校での参加者を見てみると、最終学年の生徒や、学年による分離などがなされていた。生徒80名及び教員が汽船に乗り、35日間旅行をすることは、コスト面からみて大変ではなかったのか。

明治30年の師範教育令により、師範学校の経費は、府県税や地方税からの負担であった。修学旅行の経費をいかに捻出するのか、いかに経費を抑えるかということが、各学校において大きな問題であった。財政面からも修学旅行では、徒歩での移動、旅館ではなく寺社で宿泊するなど努力が行われた。では、その当時、沖縄には金銭的余裕があったのか。沖縄における地方制度の整備とも関連していたが、沖縄は当時なお旧慣に基づく地方・税制度を踏襲していたこともあり、沖縄師範学校の経費は、府県税や地方税からの負担から除外されていた¹⁹⁾。沖縄県の将来の担い手である師範学生の修学旅行は、国の予算で実施されていたことになる。

日程についてはどうであろうか。往復も含めた日程が「三十五日間の予定」という。現在の修学旅行の実施状況からすると長い印象を受けるが、先にも提示した明治21年8月の「尋常師範学校設備準則」において「修学旅行は定期的休業中に於いて一ヶ年六十日以内」とするという規定に準じていることから、その規則に則っている。

最後に、もう一点注目すべきところがある。師範学校生を見送る人々の存在である。同じ師範学校の留守の職員が見送ることは、当然である。しかし、沖縄県内のもう一つの中等教育機関である中学校の職員も見送りに来ている。師範学校生は沖縄県においてエリートであった。沖縄の人々の期待を背に受けながら、沖縄師範学校の生徒たちは、本土へ向けて旅立ったのである。

2. 視察活動中心の修学旅行

ここでは、内地への修学旅行についてさらに考察を加えたい。具体的には、明治32年1月31日から実施された沖縄県師範学校の修学旅行での、師範学生の旅行記を手がかりに沖縄師範学校の修学旅行が視察中心であったことを確認する。

この旅行の記録について説明をしておこう。この記録は、『琉球教育』第40号(明治32年4月)および第41号(明治32年5月)に掲載された学生による旅行記である。第40号においては、1月31日～2月2日まで、花城永渡と宮城全仁の二名の記録が掲載されている。また第41号においては、前号の続きである、師範学校生4年生の石垣用宗の2月3日～2月5日まで記録が掲載されている。この3人の記録から、彼等師範学校生がどんな経験をしたのか、何を感じたのかを確認しよう。

明治32年の修学旅行に参加したのは、第四学年の18名であった。旅行先は、神戸と東京である。

まず、彼等は汽船に乗って、沖縄から神戸へ向かった。旅行記は1月31日の神戸へ着く直前からスタートしているため、いつ沖縄を出発したのかははっきりとはわからない。花城の記録では、船酔いの状況を記した文章の中に「5日あまりも死の境に在りて、待ちわびし今日」とあり、宮城のそれでは「那覇港を出発して五六日」とあることから、おそらく1月25日あるいは26日に沖縄を出発したと考えられる。なお、帰りの船便に乗り込む記録や那覇港に到着する様子もこの記録には掲載されていないため、全行程で何日間を要したのかはこの記録では分からない。

沖縄から出発した一行18名は、1月31日午前9時に神戸港に着港する。その時の彼等の様子は次のようである。

那覇港を発してより、五六日間は、初終茫々たる大洋、散在せる島嶼、重畳たる山嶽を観るのみなれば、いかに造物者、否我が二尊の力を盡して、造り出だし給へる美景とは雖へ、観あきて興なく、只船室に籠り居て、時々首を擡げ、窓中より此處彼處の景色を打ち眺むるのみなりき。されど今日は、神戸着の日なればとて、同輩は早朝より勇み立ちて、甲板を駆け廻り、未だ八島、壇浦（ママ）は見えざるか、未だ淡路島はみえざるか、由良海峡は何方にかと、相語合ひて、二三日前の鬱陶たる様子は、皆いつくにか飛び去りけむ、いと疑はしかりき²⁰⁾。

この文章からもわかるように、彼等が神戸に降り立つことがいかに楽しみであったのか、その様子がうかがえる。神戸に着く日、早朝から甲板を駆け廻り、今か今かと待ちきれない様子から、彼等はこの旅行に、大きな期待を抱いていたということがわかる。彼等は、この旅行の中で、様々なものに出会うのである。

明治30年代の他府県の師範学校の修学旅行から行軍演習の特色を切り離すことができなかつたなか、沖縄の場合は、行軍演習の要素をこの修学旅行に見出すことはできない。視察活動に重点が置かれていたことがわかる。1月31日の兵庫県師範学校附属小学校の授業の視察、同日マッチ製造会社の見学、翌2月1日の製紙会社の視察、2月4日博物館への視察、同日高等師範学校附属小学校単級室の参観などである。また、彼等は「自由時間」において、観光地を散策していたことも確認される²¹⁾。地理や風景の描写から、彼等が何を見て何を感じたのかを知ることができる。まず、神戸での次の一節を見てみよう。

午餐後、六七名の同意者と、舞子、明石の風光を探討せむと欲して、神戸停車場に駆け行きぬ。至れば則ち時已に後れたり、幸いに一時三十分の発車あり、之に乗りて彼こに向ふ。乃ち神戸、兵庫を通過し、曠漠たる原野に出づ、車窓より左に望めば、淡路島は海中に在り、風光絶佳なり。漁船所々に散在し、一層に風光を添ふ、是を明石浦と為す。この間に塩屋、須磨、舞子、及び舞子公園あり、明石に至りて下車す²²⁾。

この箇所は、2月1日の神戸での「自由時間」に生徒たちだけで神戸から舞子公園に向った様

子を記したものである。目的地の名称の紹介だけでなく、その道中の電車の車窓から見える景色も克明に描いている。彼らにとっては、目的地に行くことだけではなく、その道中も、かけがえのない風景であり記憶になるのである。また、次の箇所からも彼等の地理描写の丁寧さを更に確認することができる。

午前第八時起き出すれば、天気晴朗にして、風波共に穏なり、船は東方に向て進み、右に伊豆七島を囓み、左に伊豆半島を望めり。富士の高嶺は東北に當り、巍然として雲を凌ぎ、白雪を戴けり。其の景色の美にして妙なる、言はむ方なし。正午に至り、観音岬を過ぎて、東京湾に入れば、幾千の鴨奴、いと嬉しげに翔け戯ふるる^{さま}状、余等を迎ふる者かとぞ疑はる。同岬は上総の富津岬と相對して、東京湾を擁し、其辺には、許多の砲台ありて、守備頗る嚴なり²³。

これは、神戸から東京へ向かう神戸丸の中から見た風景である。沖縄から約1600キロと遠く離れた場所を、あたかもそこへ行ったことがない人でも想像できるような説明がなされている。では、なぜこのような丁寧な説明がなされる必要があるのか。この旅行記が掲載されている『琉球教育』は、沖縄県における教員が主な読者層である。生れてから一度も沖縄県外に出た事のない教員も多い時代である。その人々にも理解できるような説明が必要とされた。師範学生の旅行記でありながら、本土を経験していない教員にとっては、本土について学ぶ教科書だと言ってよい。教員は、師範学生の経験を参考にしながら、小学校の生徒たちに本土について教授するのである。上記の二つの旅行記からもわかるように、彼等は、非常に丁寧に地理や風景の描写をおこなっていることがわかる。それは、近代的な技術経験においても同様であることが確認できる。

先で記したように視察の目的地は、主に学校と工場の二つに大別される。いずれも、他府県の師範学校でもよく実施されていることであった。紙幅の都合上、ここでは、近代技術の出会いに焦点をあてる。近代技術を代表するものとして、工場視察と移動手段である汽車や汽船について取り上げる。近代技術は、明治政府が尽力した殖産興業を支えており、当時の日本の発展において、象徴的なものであった。

彼等は、神戸においてマッチ工場と製紙工場の見学に行っている。工場に関して、それらの分業形態について彼らが非常に関心が高いことがわかる。製紙工場については、「製紙会社に到り、その製造の有様を巡覧し、規模の宏大なるには、只驚くの外なかりき」と記している。それだけでなく、労働形態についても関心を示している²⁴。

また、修学旅行の中でのもう一つの近代的な技術体験は、移動手段つまり乗り物である。その当時の沖縄の海路の状況は、藩政時代に政府から下附された大有丸(600トン級)を、沖縄県が1880年(明治13)5月に三菱会社に委託して、神戸那覇間を就航させていた。明治19年における蒸気船の花公からの出帆数は65、那覇港への入船数は63である。月平均約5隻の蒸気船が那覇港を出港していた。多くの師範学生は、汽船を目にしていただろうが、実際にその船に

乗り込むということは修学旅行が初めての体験だったであろう。

かれらは、一度の修学旅行で、汽船だけではなく、汽車も利用している。移動手段がほとんど乗り物を利用するということは、他府県と比べると特徴的である。先にも述べたように、他府県での修学旅行では、行軍演習がその一部を為しており、移動の基本は徒歩であった。

その当時の、汽車や汽船という交通手段は、それ以前の江戸時代では考えられないほど遠くまでの移動を可能とした²⁵⁾。

師範学生の旅行記に戻ろう。横浜から急行列車に乗った生徒は以下のように汽車の感想を記している。

横浜停車場に着し、同三十分発の急行列車に乗り、東京新橋に向へり。急行列車とは、途中の停車場に止まらざるを謂ふなり。車聲轆々として、其の馳すること矢の如く、大森及び品川等の諸駅を経、四十分を出でずして、新橋停車場に着しぬ²⁶⁾。

急行列車が走る姿を「矢の如く」といった表現をしているが、彼等にとって、急行列車のスピード感がどんなものだったのか、分かりやすく表現されている。また、汽車や汽船以外にも、人力車や自転車が多数往来している様子に驚いている。東京の街中の話で、夜に自由散歩を許された時に、街燈の明るさがまるで白昼のようだったことに驚いている様も書き記している。また電話や電信技術が進んでいるのを見て、「実に帝国文明の中樞たる、疑を容れざるなり」と記している点もこの近代的な技術に関心が高い表現であるだろう。

3. 内地と沖縄との差

前項で示したように、明治32年の沖縄師範学校の修学旅行は、他府県の師範学校と比べ視察や観光が中心であり、現代実施されている修学旅行の形態に近い特徴があった。本項では、明治35年の修学旅行が沖縄学生に与えた衝撃について考察したい。明治32年の修学旅行記と明治35年の修学旅行記を読み比べてみると、大きな違いがある。明治32年の修学旅行では、視察活動に重きが置かれており、その記録からは、学習・研究活動は確認できない。また同年の旅行記は、新しい技術に対しての驚きや発見、そして感動が中心に書かれていた。他方、明治35年の修学旅行については、同じような感動、驚き、発見が書かれるというだけではない。師範学校の生徒たちの内地や新しいものへの考察にとどまることなく、それを沖縄の現状と比較して語るという姿勢を確認することができる。視察活動の視点だけではなく、ようやく、学習・研究活動が実施できたと言える。そこで、沖縄より進んだ日本（内地）の姿を目にする。その日本の姿に感動を受ける一方で、その眼差しは、沖縄の方へ向けられる。沖縄県内に自分たちが居た際に考えなかったことを、沖縄から出て、本土に身を置き沖縄を外から眺めた時に、初めてその差異に気付くようになるのである。彼等の心境に何が起きたのか。

では、明治35年4月の『琉球教育』第73号に掲載された旅行記を見てみよう。この旅行記は、これまでの旅行記と少し書き方が異なる。これまでの旅行記は行程を示しながら、自分たちの

感動を中心にまとめた記録となっていたが、明治 35 年の文章は、沖縄と本土を対比しながら論をすすめている。もともとこの原稿は、生徒会で学生の岸本が発表するために書かれたものである。そのため、これまで書かれた旅行記の文章と異なる。しかし、ここで重要なのは、師範学校の生徒が、自ら沖縄と日本との間に差異があることを提示している点である。この文章の冒頭に以下のような文章が記されている。

私がまだ内地へ行かぬ前にも、我が県が内地に比して劣って居るとは信じていたけれども、実際に行ってみると、予想外に相違があるのであります。其れもそのはず、私どもがこの度経過いたしましたのは、大阪、京都、東京の三府と兵庫、奈良、神奈川の三県とで、帝国に於いても、撰び撰んだ場所を見たのであれば、我が県と比較してとやかく批評する限りではないが、我が県が内地に比して勝れて居るといふ点の一つも見出し得なかつたのであります²⁷⁾。

この文章の中には、内地に行く以前から、内地に比べ沖縄が「劣って居る」とわかっていたという告白が記されている。しかも「予想外に相違があ」った。上記の文章にも記されているように、彼等が旅行した、大阪、京都、東京の三府と兵庫、奈良、神奈川の三県は、日本の旅行地として象徴的な場所である。東京と京都は、江戸時代から人気の観光地であった。明治に入っても、東京と京都は観光地として揺るぎなかった。東京は、「首都東京」、「近代都市東京」というイメージが広がり、観光対象は、時代の先端をいく建造物であり、その対象はめまぐるしく変わっていく。京都は、江戸時代に引き続き、寺社見学が中心であったが、それに加え、近代技術を象徴する琵琶湖疏水・インクラインなども注目されていた。また、この二つの都市以外についてはどうかというと、京都と同じように歴史都市である奈良、商業都市大阪、関西の貿易拠点である神戸、そして日本の貿易港である横浜といったように、どの地も、日本における文化や歴史の象徴都市、もしくは近代都市としての主要都市である。このような都市が旅行の目的地として設定されていたのは、日本が近代国家となり得たことを示す、啓蒙的な意図が背後にあることがわかるだろう。そのことは、生徒はわかっているようで、これらの都市と沖縄を「比較し批評する限りではない」と述べているものの、彼等の文章からは、沖縄と上記の都市との差異について意識せざるを得ない心情が伝わってくる。

さらに、生徒は、机上で学んだ知識を頭の中で想像した（再構成した）ものと実際のものとの間に違いがあることを指摘する。他の地域に自ら足を踏み入れることによって気付く点について例を提示しながら、説明している。

吾々は、是まで日本地理及び万国地理を学びましたが、何を学びますにも、本県にある地理的现状、事実を基礎として想像したのでありますが、実際内地に行つて、実地を踏査して見ますと、或は、想像が大に過ぎて居たのもあるが、多くは想像が及ばないで実物に接して驚くという塩梅であります²⁸⁾。

生徒たちが物事を考える際の尺度が、沖縄県の尺度を基本としていたこと、しかもその尺度が日本のそれとは、異なっていたことに彼らは気付いていた。また、自分たちが想像していたその多くが実物に及んでおらず、実物に驚いていたことがわかる。この生徒は、授業から得た知識、読書によって得た知識を実地調査（この場合、観察）を通して、より本物に近い知識として獲得することの重要性を指摘している。

最後に注目しておきたいのが、言語についての所感について書かれている点である。これは、今までの修学旅行記と明らかに違う。地形や気象の違いは、本土と沖縄という空間の中での違いとしてそれぞれ語られる。しかし言語の問題は、本土に足を踏み入れた自分たち（生徒たち）が内地の人々から観察の対象になっていることを表している。

次に、言語に就いて所感を述べますが、我々の言語がどの位まで進歩して居るかは、内地へ行ってみなければ分らないので御座います。諸君、吾々の言語は、東京辺の流暢円転水の流るるが如き場所に出て見ると、聞かれたものでないのであります。即ち、訥にして、野卑ですから、忽ち田舎者視せらるるのであります。否、実際、田舎者なのであります。孔夫子も、巧言令色鮮仁矣と云われましたが、今の交際社会に立って世を渡ろうには、口八丁、手八丁でなければ到底人に先んずることはできない。ましてです、御互のように教育事業に従事すべきものは、一層その必要を感じるので御座います。何卒練習をつまれん事を希望致します²⁹⁾。

自分たちのことを「野卑」という言葉で表現していることに注目したい。自分たちが見学した都市と比べて、沖縄の地位が低いというのである。世の中を渡ろうとする際、行動も話すことも内地の人、この場合、内地の一地域並みというわけではなく、首都東京などで話される共通語に近い日本語を話さなければならないと考えている。この文章から分かることは、沖縄という空間だけで生活をするのみならず、日本という空間の中で、ましてや更に広い空間の中で生活することを想定しているのである。彼等の地理感覚は、もはや、沖縄だけを頭の中に想像しているのではない。沖縄を含んだ日本地図一さらにそれは日本以外まで想定されており、その地図を拡大し、縮小しながら、物事を捉えていると言えるだろう。

むすびにかえて

本稿では、沖縄エリートの地理感覚の拡大を促した一つの契機として沖縄師範学校の「修学旅行」を考察した。同時代の他府県の師範学校の修学旅行が研究活動を含むも、軍事的要素を切り離すことができなかつたが、沖縄師範学校の内地への修学旅行には軍事的要素が含まれていなかったことを確認した。明治32年と明治35年の沖縄師範学校の修学旅行記は、本土体験を描く視点が変化していたことを示した。明治32年の沖縄師範学校の修学旅行では、新しいも

のを見たり、体験したことへの感動が中心に描かれている。後の明治 35 年の修学旅行においては、感動や驚きを確認する作業を通して沖縄と日本を比較するようになる。そこに「遅れている」沖縄を沖縄の新エリートは発見した。

地理的想像力は、一人一人が頭の中に描く地図に由来する。個人によってその地図の広さは異なる。明治期の人々—それは沖縄の人々だけではなく、日本に住む人々の多くが、学校教育で「地理」を学ぶも、すぐに、頭の中の地図を容易に拡大させる契機にはならなかった。多く人は、自分の居住している村や町から外に出る機会がなかったため、自分の住む地域だけを描くに留まっていた。修学旅行という移動体験を通して、沖縄の新世代エリートの頭の中の地図は拡大していったのである。

沖縄の学生は、自分たちの置かれている立場を悲観したまま話を結んでいるわけではない。未来の沖縄を自分たちがどうしていくべきかを考える。その根底には、彼等の使命感が現れている。

してみれば、自然の感化に於いて、沖縄は全然内地に対し歩を譲らねばならぬかというに、決して左様な訳ではない。沖縄には、また沖縄の特質があって、温暖なる気候は沖縄人に幸福を与えるのである。只これを利用すると否とに依って、幸不幸が分かるのであるから、凡そ県民たる者は黽勉努力以って、本県の発達進歩を企図せねば到底内地同様の位置に達することは出来まいと思います³⁰⁾。

温暖な気候は、沖縄人に幸福を与え、これを利用しないわけにはいかないと指摘している。県民は、「黽勉努力」をもって、沖縄県の「発達進歩」を企図する必要を主張している。

彼等は、修学旅行を通して、「沖縄が帝国の如何なる立場に居るか如何に多くの欠点を有せるか等を知」り、「沖縄の為に憂え、沖縄の為に尽くそうという念慮が起こった」という³¹⁾。彼等は、沖縄を離れ、本土に足を踏み入れたことによって、沖縄を外から眺めることができた。はじめて沖縄の位置を外から確認した。それは、沖縄本島内での修学旅行では、知り得ないことであった。沖縄県内では、新エリートとして地元の人々には尊敬の眼差しが向けられていた師範学生ではあったが、内地への修学旅行によって、自分たちが観察の対象になっていたことにも気づくのである。自分たちの服装は他の人々にはどのように映っているのか、また自分たちの言語はどう聞こえるのか。彼らの心にこのような葛藤が生まれた。

このような葛藤こそが、自分たちが未来の沖縄を牽引するという気概に他ならない。風俗の改良や、言語をはじめとする教育の必要性を新エリートは説く。彼らは、沖縄人自らが日本へ協調していく姿勢を今後の未来像として選択するのである。それは、自らが沖縄の将来を憂えて自らが他府県と同様に沖縄のことを考えての選択であった。言語や風俗の改良は、その後の沖縄はどうあるべきかという課題に通じる。このような点を鑑みれば、修学旅行を通じた新エリートの地理的想像力の醸成は、日琉同祖論の一前提になる。

注

- 1) 沖縄における師範学校の成立は、1879年の沖縄県設置とともに始まった。1880年2月、師範学校の前身である会話伝習所が設置され、同年6月に沖縄師範学校へと発展改称した。その後、1881年に沖縄県立師範学校に、1886年11月、師範学校令により、沖縄県尋常師範学校へと改称される。1898年4月1日に師範教育令により、沖縄県師範学校と改称される。本稿で取り上げる時期は、日清戦争終了以降の明治後期である。この時期の師範学校の正式名称は、沖縄県師範学校であるが、以後、沖縄師範学校と記す。
- 2) 筆者は、これまで沖縄師範学校の設置の状況および師範学校で使用されていたテキスト『沖縄対話』について考察を行った。拙稿「近未来予想図としての『沖縄対話』—沖縄の近代化に関する一考察」（『立命館大学国際地域研究』第27号、2008）を参照されたい。
- 3) 本稿で使用する「沖縄」、「内地」、「帝国日本」などの表現は、歴史的名詞としてそのまま使用している。
- 4) 「教科外活動」という表現は、「今日的な表し方」のように思われる。しかし、浜野（2004）が指摘しているように、明治期における、「科外教育」、「校外教授」は、現在の「教科外活動」の起点を有していると筆者も考えているため、小論では、「科外教育」や「校外教授」を「教科外活動」という言葉を用いている。
- 5) 教育史編纂会『明治以降 教育制度発達史』第三巻、p. 520。
- 6) 師範学校の修学旅行に関する研究は次のようなものがある。東京師範学校の長途遠足については、浜野兼一（2004）と新谷恭明（2001）の研究がある。前者は、修学旅行の端緒とされる東京師範学校の「長途遠足」のそれ自体の成立過程を明らかにし、東京師範学校の「長途遠足」は、森有礼の掲げた国家主義的教育を反映し、成立したと結ぶ。後者の新谷は、東京師範学校の「長途遠足」を日本最初の修学旅行とした上で、当時学生だった平澤金之助の旅行記の紹介を行っている。

また、福岡尋常師範学校の研究については、新谷恭明（1995）があり、こちらも、生徒の旅行日記についての史料紹介である。尋常師範学校成立期における修学旅行の実態と比較して福岡尋常師範学校の旅行の実態について考察している。新谷（1995）は、福岡尋常師範学校の修学旅行について、軍事演習が目につき、「ほとんどが移動に費やされている」ことから、「行軍それ自体が目的であったように見えなくもない」と評している。

埼玉県師範学校の修学旅行に関しては、浜野兼一（2007）がある。この研究は、師範学校における修学旅行が法的に規定（明治21年8月）される以前と以後の二つの時期区分において、修学旅行の実施状況の変化を明らかにしたものである。法的規定以前は、実施時期や内容において東京師範学校の影響が強くみられたこと、そして、法的規定を挟み、「遠足」から「行軍」、そして「修学旅行」へと呼称が変遷し、内容が充実していったこと、さらに、学術研究と兵式演習が分離したことで、修学旅行はそれまで以上に学術研究の側面が深くなり、軍事的なように特化した行事を行うことが可能になったことを指摘している。

その他にも、同時代の女子師範学校の修学旅行の導入については、浜野兼一（2004）、奥田環（2011）などもある。また、修学旅行身体を鍛えるという点で「体育」と切り離すことができないということは、これまでの研究で指摘されている所でもある。
- 7) 前掲書、p. 191。
- 8) 明治23年3月27日28日の修学旅行の内容は、以下のように記されている。

「校長以下の職員、生徒八十七名を率いて去月廿七日第一列車を以って浦和を發し修学旅行として比企郡松山地方へ向けて出發せり途次吉見の鉱泉百穴及び松山城址等を探検し…（中略）…翌日は松山町と西平村との界にて射的の演習」を行っている（『埼玉県教育雑誌』第79号、明治23年4月、p. 45）。
- 9) 公益財団法人全国修学旅行研究会「修学旅行センター」、修学旅行年表< <http://shugakuryoko.com/>

museum/rekishi/index.html > (2011/10/7 アクセス)

- 10) 福島県尋常師範学校『福島県尋常師範学校第六年報』明治29年3月、pp.46-47。
- 11) 『明治以降教育制度発達史』第三巻、p.633。
- 12) 前掲、p.10。
- 13) 『琉球教育』は、明治28年10月25日発行を第一号とし、明治39年3月、『沖縄教育』と改題されるまで116号発行された教育雑誌である。『琉球教育』の発行所、編集兼発行人は、奥付によると次の通りである。1号～98号までは、沖縄県私立教育会事務所、99号～116号までは、沖縄教育会事務所、編集発行人については、1号～91号までは、知念信愛、92号～116号までは宮城亀である。初代の会長は、当時沖縄県知事であった奈良原繁であった。会員は、そのほとんどが沖縄県における教育関係者であった。
- 14) 明治29年5月に実施された修学旅行の日程は、以下のようだった。
沖縄師範学校の修学旅行は今5月1日より向9日間の日割に依り国頭郡本部名護邊に至る目的なりと云ふ
第一日目 首里発 美里着、第二日目 美里発 金武着、第三日目 金武発 九志着、第四日目 久志発 金婦仁着、第五日 金婦仁発 本部着、第六日 本恩発 名護着、第七日 名護発 恩納着、第八日 恩納発 読谷山着、第九日 読谷山発 首里着
修学旅行を何の目的で実施されたかは、この文章では理解できない。また、一日一日の出着場所しか記されていないが恐らく兵式演習形式で行われたと推測される。
- 15) 修学旅行の全国への広がり、各府県の師範学校での実施が一つの錠となっている。沖縄においても、まず、尋常師範学校で修学旅行が実施されてから、小学校、中学などへと広がりを見せたといえるだろう。
- 16) 『琉球教育』第12号(明治29年12月)[第2巻、p.50]
- 17) 『琉球教育』第15号(明治30年3月)[第2巻、p.143]
- 18) しかし、その次に実施される明治32年の本土への修学旅行では、最終学年が対象となる。他府県と同じようになった。興味深いことに、明治30年の時点で在籍していた生徒(その年の最終学年は除く)は、九州旅行と東京旅行をそれぞれ一度ずつ体験していることになる。
- 19) 沖縄県においてのみならず、北海道においても、明治30年の師範学校令で示された県税・地方税の負担は、除外されている。
- 20) 『琉球教育』第40号、明治32年4月[第4巻、pp.356-361]。
- 21) この当時の修学旅行において、「自由時間」が設定されていることは、非常に興味深い。通常の修学旅行では、兵式演習の形態がとられていたこともあり、「自由時間」は確認できない。視察や観光を中心とした沖縄師範学校の修学旅行であったからこそ、「自由時間」は設定されている。「自由時間」の設定の意義に関しては、今後の研究の課題としたい。
- 22) 花城永渡「修学旅行日記」(『琉球教育』第40号、明治32年[第4巻、pp.356-361])
- 23) 石垣用宗「東京地方修学旅行日記」(『琉球教育』第41号、明治32年[第5巻、p.22])
- 24) 生産量や労働形態への関心については、以下の記録において確認することができるだろう。「該所は明治十一年の創立にして其製出する所、日に六万磅の巨額に陞り、職工二百余人を使役し、晝夜の別なく労働せり。この会社の社主は、初め米国人なりしが、程なく死して、三菱その後を承く、職工に月俸者と日給者との二種ありて、月俸者は最高額七十圓、最低額四十圓を受け、日給者は三十五錢より二十五錢に至る。製紙の原料は、縹纒と稻藁にして、各国にほろ商あり、以て原料を集むと云ふ。」(宮城全仁「修学旅行日記」『琉球教育』第40号[第4巻、p.359])生産量が「日に六万磅」であったことがわかる。また、職工に月俸者と日給者の二種があることは、彼等にとっては、知り得ない情報であった。
- 25) 沖縄師範学生の東京への修学旅行が行われたのが、明治30年以降だが、その年より少し前の明治27年は、日本鉄道史上新たな時代に入ったと言ってもよい。10月に日本で初めて月刊の時刻表が発刊された

地理的想像力の醸成と沖縄師範学校の修学旅行（松永）

のだ。創刊したのは、東京の庚寅新誌社という出版社で、誌名は『汽車汽船 旅行案内』である。この『汽車汽船 旅行案内』は、A5サイズの大きさを、時刻表の他に沿線名所案内も記載されていた。便利な旅行案内としての役割も果たした。『汽車汽船 旅行案内』は、発刊と同時に人気を博し、出版各社が挙って時刻表や旅行案内書を出版するようになり競争が激化したという。1889年（明治22）東海道線が全線開通したこともあって、本格的な旅行の時代を迎えた。汽車や汽船が単に場所と場所を結んだ移動手段としてだけでなく、その移動手段である汽車や汽船も楽しむという考えが浸透し始めた時代であったと言ってよい。そういった時代の中で実施された修学旅行における汽車や汽船についての師範学校生徒の記述は、当時の旅行者が共通して抱く感動をも表しているといえる。

26) 明治32年には、日本鉄道会社が、団体割引料金制を開始している。児童・生徒の修学旅行または一般の団体旅行の際、乗車距離が片道十里以上であれば、次のような割引率であった。

大人（満十二歳以上）乗車人員		
	五十人以上百五十人未満	二割五分
	百個十人以上三百人未満	三割五分
	三百人以上	五割
小人（満十二歳未満）乗車人員		
	五十人以上二百人未満	二割五分
	二百人以上四百人未満	三割五分
	四百人以上	五割

（『埼玉教育雑誌』第204号、1899年）

この団体割引が設けられたことでもわかるように、この明治三十年代前半は、修学旅行の一つの変化の時期といえるだろう。当時、修学旅行の出費が高学なため修学旅行をやめていた学校も多々あった。団体割引の導入により、修学旅行へのハードルが低くなったと言える。それは、出費が低くなり、更に、より遠くへ移動することが可能になったことを意味する。

27) 『琉球教育』第73号「内地修学旅行談」[第8巻, pp.89-96]

28) 前掲書 [p.91]

29) 前掲書 [p.95]

30) 前掲書 [p.96]

31) 前掲書 [p.90]

参考文献

井上潤「『修学旅行記』にみる渋沢敬三の学問的基礎過程」『歴史と民族』神奈川大学日本常民文化研究所論集, 18, 2002, pp.219-238.

上原義正「修学旅行を通じての人材育成—明治末期から大正初期における長崎県立対馬中学校の韓国・朝鮮への修学旅行の研究—」『日本特別活動学会紀要』第11号, 2003, pp.35-46.

沖縄県師範学校編纂『沖縄対話』上下, 1880.

太田朝敷『沖縄県政五十年』国民教育社, 1932.

大田昌秀『沖縄の民衆意識』新泉社, 1995.

奥田環「東京女子高等師範学校の『修学旅行』」『お茶の水女子大学人文科学研究』第7巻, 2011, pp.41-55.

大浜郁子「『琉球教育』と台湾における植民地教育—日清戦争前後の学務官僚児玉喜八の動向を中心に—」『沖縄文化研究』第28巻, 2002, pp.351-382.

- 喜名信之・井上好人「社会科教育における〈観ること〉の近代性—明治期の地理科学習と見学旅行の考察から—」滋賀大学教育学部教育実践研究指導センター紀要『バイデリア』第7巻, 1999, pp.125-134.
- 『汽車汽船 旅行案内』庚寅新誌社, 1894.
- 教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史』第3巻, 1938.
- 公益財団法人全国修学旅行研究会「修学旅行センター」、修学旅行年表< <http://shugakuryoko.com/museum/rekishu/index.html> > (2011/10/7 アクセス)
- 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店, 1996
- 近藤健一郎『近代沖縄における教育と国民統合』北海道大学出版会, 2006.
- 『埼玉県教育雑誌』第79号, 1890 (明治23年4月)
- 新谷恭明「明治期の師範学校に於ける修学旅行について—史料紹介; 福岡県尋常師範学校生徒の旅行日記」『九州大学教育学部紀要』第41号, 1995, pp.45-60.
- 「日本最初の修学旅行の記録について—平澤金之助『六州遊記』の紹介—」『九州大学大学院教育学研究紀要』第4号, 2001, pp.37-61.
- 照屋信治「『琉球教育』(1895-1906)にみる沖縄教育の展開—「学術」「教授と訓練」欄の傾向を中心に—」教育史学会『日本の教育史学』第49集, 2006, pp.71-83.
- 浜野兼一「明治期における学校行事の研究—運動会・遠足にみる修学旅行成立への布石—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊(9-2), 2002, pp.119-127.
- 「明治期における埼玉県師範学校の遠足・行軍・修学旅行について—法的規定以前の実態に関する一考察—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊(11-1), 2003, pp.109-119.
- 「東京師範学校における『長途遠足』の成立過程に関する研究—身体的鍛練の側面に関する一考察—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊, 2004, pp.11-24.
- 「埼玉県師範学校の修学旅行に関する一考察—明治十七年から二十六年までの史的変遷を中心に—」全国地方教育史学会『地方教育史研究』第28号, 2007, pp.65-85.
- 比嘉春潮『比嘉春潮全集』第4巻, 沖縄タイムス社, 1971.
- 福島県尋常師範学校『福島県尋常師範学校第六年報』1896 (明治29年) 3月.
- 松永歩「近未来予想図としての『沖縄対話』—沖縄の近代化に関する一考察—」『立命館国際地域研究』立命館大学国際地域研究所第27業, 2008, pp.91-109.
- 水内俊雄「地理思想と国民国家形成」『思想』岩波書店, 第845号, 1994, pp.75-94.
- 『文部省第二十四年報』1896.
- 山本信良・今野敏彦『近代天皇制のイデオロギー』新泉社, 1973.
- 吉見俊哉『博覧会の政治学』中央公論社, 1992.
- 『琉球教育』沖縄県私立教育会事務所(1895 - 1906) [復刻版/州立ハワイ大学, 1980]
- 琉球政府『沖縄県史』第1巻, 1977.
- 琉球政府『沖縄県史』第3巻, 1973.
- 琉球政府『沖縄県史』第4巻, 1966.